

第十三章 日英同盟ト獨逸

日英同盟締結ノ趣旨

日英兩國政府ハ今回同盟協約ヲ締結シ、英國ニ於テハ本月十一日、又我邦ニ於テハ同十二日ヲ以テ各其議會ニ發表セリ。抑モ帝國政府カ本協約ヲ締結スルニ至リタル理由ハ、專ラ東亞ノ現狀ヲ維持シ清韓兩國ニ於ケル帝國ノ權利ト利益トヲ擁護増進スルニ在リ、蓋シ韓國ハ各種ノ點ニ於テ我邦ト最モ緊切ナル利害關係ヲ有シ、其運命ハ我邦ニ取り所謂死活ノ問題ニ屬セリ、故ニ若シ他邦ニシテ韓國ノ獨立ヲ害シ、領土保全ヲ危フスルノ行爲ニ出ツルモノアラハ、帝國ハ極力之レニ抗シ、寸地ト雖モ爭ハサルヘカラス、要スルニ韓國ヲシテ他邦蠶食政略ノ結果ヲ被ラシメサルコトハ、帝國ノ根本的政綱ニシテ、此政綱ヲ堅守スルハ即チ帝國ノ安全ヲ期スル所以ニ外ナラス。

次ニ滿洲ニ關シテハ、露國ハ毫モ永久占領ノ意思ナシト云ヒ、又早晚撤兵後行政還附ヲ實行スヘシト稱スルモ、彼ハ既ニ該地方ニ於テ鐵道及軍港ヲ有シ、又鐵道保護ノ爲ニ駐兵ノ權ヲ有スルノミナラス、益々其權力ヲ擴張樹立シ、終ニ該地方ヲ擧ケテ其有ニ歸セントスルノ底意アルヤ些ノ疑ヲ容レス、然レトモ露國ヲシテ現存條約ノ範圍ヲ越エテ其統治權ヲ滿洲ニ擴張セシムルカ如キハ、帝國カ他ノ列國ト共ニ唱導シ來リタル清國領土保全ノ大主義ト背反スルノミナラス、其最モ憂フヘキハ之レカ結果韓國ノ獨立ヲ危フシ、

延テ帝國不安ノ因タルヘキヲ以テ、帝國ニ於テハ努メテ之レヲ防止セサル可ラス。

將タ滿洲以外ノ清國ニ關シテハ、是亦他ノ一國ヲシテ領土的利益ヲ專占セシムル時ハ、爲ニ清國分割ノ端ヲ開キ、東亞全局ノ均勢ト平和トヲ攪亂スルニ至ルヘキモノニシテ、其局又帝國ノ安危ニ關スルコト尠ナカラス、加フルニ清國ハ我商品ノ大市場ニシテ、又我資本ノ海外ニ於ケル殆ント唯一ノ投下場タリ、現ニ方今ニ於テモ清國ノ外國貿易中帝國カ占ムル處ハ、價格ニ於テ英ニ下ルノミニシテ、他ノ全歐ヲ合シタルモノヨリモ大ナリ、殊ニ一昨年ノ北清事變以來清國上下舉ツテ、我邦ニ信賴スルノ念ヲ厚クシ、我商工業者モ亦大ニ奮起シ來リタルヲ以テ、我對清貿易ハ多年ヲ出スシテ英國ヲモ壓倒スルニ至ルヘキ望アリ、故ニ此間他國カ清國ニ於テ商工業上獨占的利益ヲ獲得スルハ、我國ノ爲頗ル不利益ニシテ、帝國ハ飽迄清國門戶開放ノ主義ヲ把持セサルヘカラス、之レ單ニ支那本部ニ關シテノミナラス滿洲ニ於テモ亦然リトス。極東ニ關スル帝國政府ノ政綱ハ實ニ上記ノ如ク、而シテ政府ハ深ク時局ニ鑑ミ、上記政綱ヲ維持遂行スルニ於テハ、帝國ト利害ヲ同フスル與國ト一層緊切ナル關係ヲ結フヲ有益ナリト認メ、昨年以來英國政府ト屢次交渉ヲ累ネタルカ、其結果トシテ相互ノ意見幸ニ一致ヲ得タルニ依リ、茲ニ本協約ヲ締結スルニ至レリ、就テハ閣下ハ上陳ノ主旨ヲ體シ、嗣後益々帝國ノ爲盡瘁セラルルヲ希望ス。

尙又本協約ノ目的ハ全然平和的ニシテ、何レノ國ヲモ敵視スルモノニアラス、否却テ總ヘテノ列國ト共ニ平和ノ利益ヲ享受センコトヲ期望スルモノニシテ、加フルニ清國ノ領土保全ト門戶開放トハ、北清事變以來列國カ各自聲明シタル主義ニ外ナラサルヲ以テ、本協約ハ何レノ國ヨリモ嫉視セラルヘキ理由ナク、又

極東ニ關スル事項ニ付別ニ第三國ト協商ヲ遂クルノ必要アル時ハ、本協約第四條ニ依リ之レヲ爲スノ餘地アルモノニシテ、即チ同條ハ其別條記載ノ利益ヲ害セサル限り、隨意ニ別國ト協商ヲ遂ケ得ルコトヲ、其反面ニ於テ規定シタルモノナリ。

右説明旁申進ス。

是レハ明治三十五年二月二十五日小村外務大臣カラ在外各使臣ニ送ツタ同文公書テ、我國カ英國ト同盟ヲ結ンタ趣旨目的ハ此内ニ悉ク盡クシテ居ル。

日英ノ接近——在英獨國代理大使ノ勸誘

日清戰役後日英接近ノ潮流ハ兩國間ニ日ト共ニ漲ツテ來タカ、明治三十三年カラ翌年ニ亘リ局ニ當ツテ居タ加藤外相ト林駐英公使トハ共ニ熱心ナ親英論者タツタカラ、其意思カ我政策ニ反影シ、日英接近ニ一大進捗ヲ齎ラシタノハ掩フ可ラサル事實テアル、英國側テモ亦氣力在ツタノハ確カテ、明治三十四年一月末「ランスダウン」外相ハ林公使ニ、日本政府カ英國政府ニ深キ信用ヲ置イテ交ハルノハ満足ニ堪エヌ、英國政府モ亦爾今同一ノ信用ヲ日本政府ニ置イテ應待スル決心タ、ト告ケタカ日本カラ見テ同盟協約開談ノ直接ノ原因ト成ツタモノハ、在英獨逸大使館參事官ヲ其頃代理大使ヲシテ居タ「エツカードシュタイン」男カラ明治三十四年四月林公使ニ爲シタ日英獨三國同盟ノ勸誘テ、之レニ付林伯ノ手記トシテ大正二年時事新報ニ掲ケラレタ所ハ左ノ通りテアル。

「エツカードシュタイン」男曰ク、自分一個ノ意見テハ、極東ノ平和ヲ維持スルノ方法トシテハ、新タニ日英獨三國ノ同盟ヲ結フニ若クハナイト思フ、自分ノ承知スル所テハ、英國ノ内閣員中テモ「チエーンバレン」氏「バルフォア」氏「ランスダウン」侯「デヴオンシャー」公ナトノ有力者ハ、疾クヨリ英獨同盟ヲ持論トシテ居ル、近クハ「ソールスベリー」侯モ亦其說ニ同意スルコトト爲ツタ、我獨逸テモ民間ニハ英國排斥熱カアルケレトモ、政府ノ方針ハ決シテ左様ナ譯テナイ、殊ニ我國ニ於テ最モ高貴ナ御方（是レハ察スル所獨逸皇帝ト宰相「ビュロー」伯トヲ指シタモノテアロウ、故「ウキクトリヤ」女皇崩御ノ際英國先帝「エドワード」七世ト獨逸皇帝ト屢々「オスボーン」離宮テ閑談ヲ爲サレ、「エツカードシュタイン」男ハ其都度御側ニ侍ツテ居タソウタカラ、其場所ニテ此消息ヲ看取シタモノテアロウ）ハ、此同盟ニ賛成セラレテ居ルカラ、今日日本ノ方カテ英國ニ向ツテ此事ヲ提議シタナラ、彼ノ内閣ハ必定之レニ應シテ相談ヲ始メルコトテアロウ、而シテ其同盟條約ハ五個年ヲ期限トシテ、タビタビ繼續スルモノトシテ、其條件ノ一ツトシテハ日本ハ朝鮮ニ於ケル自由行動ヲ獨英兩國カ承認シ、同盟國ノ一カ第三國ト戰端ヲ開イタトキハ同盟二國ハ中立ヲ守リ、他ノ第四國カ敵國ヲ助ケル場合ニハ、同盟二國ハ來テ其一國ヲ助ケルコトトシ、詰リ歐羅巴ノ三國同盟ノ様ナモノヲ作ルコトニスルコトカ好カロウト思フ、尙ホ英國カ同盟ノ提議ニ應スルノ見込カアルハ右ノ通りタカ、其場合ニハ英國カラ更ニ獨逸ニ向ツテ相談スルテアロウ、其相談カアレハ拙者ハ屹度此一條ヲ取纏メルコトカ出來ルト信スル。

之ニ對スル林伯ノ觀測

「エッカードシュタイン」男ハ林公使ニ直接ニ話ヲスル前カラ、我公使館員ニ明治三十四年ノ初メ以來幾回トナク右ト同様ノ談話ヲシタトノコトタカ、「エ」男カ如何ナル理由ヲ斯クノ如キ勸誘ヲ我ニ爲シタカ、林伯ハ之レニ對シテ左ノ如キ觀測ヲ下シテ居ル。

「エ」男カ斯様ナ勸誘ヲシタ本意ハ何所ニアツタカ、眞實三國同盟ヲ作ル爲本國政府ノ意ヲ受ケタモノカ、或ハ別ニ他ノ目的カアツテノコトカ、其邊ハ今ニ確ムルコトハ出來ナイカ、何セヨ其語氣ハ頗ル熱心ナモノテアツタ、抑モ西洋諸國中極東ニ密接ノ關係ヲ持ツテ居ルハ、英米露佛獨ノ五個國テアルカ、當時是等五個國ノ極東ニ於ケル立場ヲ見ルト、英米兩國ハ主トシテ通商上ノ利益ヲ進メルコトニ力ヲ盡シ、露國ハ領土ノ擴張並ニ政治的勢力ノ發展ニ汲々トシ、佛國ハ安南東京方面カラ支那ノ南方ニ手ヲ延ハス方針テアツタカ、内地ノコトトテ世上ノ注意ヲ惹カス、又他國ノ利益ニモ影響シナカツタ、只露國ト同盟テアルト云フ點カラシテ、常ニ同國ヲ援ケテ行動スルモノト見ラレタノテアル、最後ニ獨逸ハ貿易上ノ發展ハ固ヨリ國是トスル所テアツタカ、之レカ爲ニハ大ニ政治上ノ便利ヲ收メルノ必要カアツタ、此事ハ獨逸政府ノ人、議員モ新聞モ毎々明言シタ所テアル、然ルニ其國ノ地位カラ云ヘハ何時敵國タルカモ知レナイ露佛兩國ノ間ニ介在シテ居ル故、常ニ双方ノ國境ノ防備ヲ完全ニセネハナラヌト云フ大負擔カアル、其所ヘ貿易ヲ海外ニ擴張スル爲ニ英國ト海上ノ權力ヲ爭ハネハナラヌコトニ爲ツタ、之レヲ實行スルニ當リテ從

來ノ如ク露佛ニ對スル防備ヲ益々充實サセテ行カウトスルハ、獨逸ニ取リテ頗ル難儀ナ次第テ在ルカラ、何トカシテ露國ノ勢力ヲ他方面ニ傾注セシメ、對露防備ノ大負擔ヲ輕減シヤウト心掛ケタ様タ、是レカ當時ノ獨逸ニ取テ最モ大切ノ方針テアツタト思ハレル。

扱テ露國ノ銳鋒ヲ轉セシメル方向ハ、差當リ近東テ無ケレハ極東ニ於テ同國ニ手ノ引ケヌ様ナ關係ヲ付ケサセル外ハナカツタノテアルカ、當時恰モ露國ハ極東ニ於テ頗ル際銳イ立場ニ立ツテ居タ、即チ北清事變ヲ利用シテ滿洲ニ侵入シテカラ、日限ヲ定メテ撤兵スル約束ヲシタモノノ、營口邊カラ兵隊ヲ引揚ケテ見タリ又這入ラセテ見タリ、グズグズシテ居ル内ニ、何時シカ腰ヲ据エテ仕舞ハウト云フ素振カ明カニ見エタ、之レニ對シテ日英米ノ諸國ハ苦情ヲ唱ヘテハ居タカ、左リトテ押切ツテ其苦情ヲ言張ルモノハナイ、中ニモ日本ノ如キハ露國ニ對シテ最モ多クノ敵意ヲ挿ンテ居ルヘキ筈テアツタニモ拘ラス、充分ナ活動ヲ爲スニ及ハナカツタカ、兎角スル内却ツテ日露兩國親近ノ風聞カ段々高クナツテ來タ、所テ獨逸ノ方針カ露國ヲシテ極東ニ手ノ引ケナイ關係ヲ付ケサセルニ在リトスレハ、露國カ喧嘩ノ相手タルヘキ日本ト結フ様ナコトニナツテハ、自然獨逸ノ方針ト齟齬スル成行ニナリ、其不利益ハ申ス迄モナイ、併シ其際何レカノ強國カ日本ノ後押ヲスレハ、日本ハ之レヲ頼ミニ何處迄モ露國ニ楯ヲ突キ、爲メニ極東ノ問題ハ容易ニ解決カツカヌコトト爲リ、隨テ當分ノ間露國ノ手ヲ極東ニ縛リ著ケリコトカ出來ルノテアル。左リトテ獨逸自身カ日本ノ頼ミニナル程ノ約束ヲスルコトハ、國情カ許サナイノミナラス、惡クスルト本來露國ノ壓迫ヲ避ケル爲ノ策カ、却テ同國ノ恨ヲ買フノ種ニナルト云フ心配カアルカラ、益々以テ左様ナ役廻ハ勤メ

兼ネル、然ラハ是非他ノ第三國ニ日本ノ後押ヲサセル様ニ仕向ケネハナラヌカ、米國ハ其國體トシテ外國ト永續スル同盟ヲ結フコトハ出來ヌ、佛國ハ露國ノ同盟國テ話ニナラナイ、歸スル所日本ト結ビ得ルモノハ日頃露國ト犬猿モ雷ナラヌ間柄タル英國ノ外ハナイト、愈々同國ニ白羽ヲ差向ケタカトウタカ、是レハ臆測テハ在ルカ、兎ニ角在倫敦ノ代理大使ハ我輩ニ向ツテ、頻リニ日獨英三國同盟ノ利ヲ説イタモノテアル。

日 英 ノ 開 談

林公使ハ「エ」男ノ談話ヲ四月九日電信テ本省ニ報告シ、英國トノ開談ヲ慫慂シタラ、同月十六日加藤外務大臣カラ、公使一己ノ責任ヲ以テ且ツ少シモ日本政府ニ繫累ヲ及ホサヌ方法ヲ、英國政府ノ意嚮ヲ探ルコトカ出來ルナラ、遣ツテ見テモ宜シイト云フ返事カ來タノテ、翌十七日同公使カラ「ランズダウン」侯ニ漠然ト本問題ヲ切り出シタカ、當時「ソールスベリー」首相轉地不在中テ在ツタ爲、英國トシテモ何等經マタ返事モ出來ナカツタ所、首相ハ五月十日歸英シタカ、今度ハ日本ノ方ニ内閣ノ更迭カアツタ爲、話ハ其儘ニ延ヒ延ヒト成ツタ、然ルニ七月十五日ト十六日ニ當時歸國中ノ「マクドナルド」駐日公使カ林公使ヲ訪問シテ、英國皇帝ノ思召ト「ソールスベリー」首相ノ意見ヲ取次タノテ、茲ニ日英交渉ハ一進展ヲ成スニ至ツタ此時ノ會談ニ付テ林伯ハ左ノ如ク云フテ居ル。

「マ」氏ノ談ニ依ルト、氏ハ數日前英國皇帝陛下ニ謁見シタカ、其際陛下ニハ、日英兩國ハ此際是非トモ

何等カノ協商ヲセネハナラヌ、而シテ其協商ハ一時ノ話合位ノモノテハ、將來極東ニ起ルヘキ事件ニ應スルニ足リナイトノ御言葉カアツタ、又首相「ソールスベリー」侯ニモ面會シタカ、侯ノ意見ハ更ニ一步ヲ進メタモノテ、明カニ日英同盟說ヲ主張シ、其同盟ノ條件ハ同盟國ノ孰レカ他ノ一國ト戰端ヲ開クトキハ、同盟ノ片相手ハ局外中立ヲ守リ、若シ敵國カ二國以上ニナルトキハ、同盟ハ連合シテ之レニ當ルコトニシタイト云フノタソータ、尙ホ氏ハ言葉ヲ續ケ「英國政府ハ實際日本ト同盟スルコトヲ希望シテハ居ルカ、併シ是ハ英國從來ノ主義ト背馳スルコトニ爲ルカラ、愈々實行スル迄ニハ相當ノ熟慮ヲ要スル、從テ時日モ費サレルノテアル」ト語り、更ニ「斯ク時日ヲ費ス間ニ、日本カ露國ト協商スル様ナコトハナカロウカ、實ハ獨逸ノ代理大使モ、外務省ヘ遣テ來テ其心配カ在ルコトヲ頻リニ述ヘテ居タ」ト問ヒ掛ケタカラ、我輩ハ之レニ答ヘテ「日本ノ感情ハ現ニ露國ニ乖離シ英國ニ向テ居ル場合テアル、併シ感情ハ末テ利益カ本テアルカラ、若シモ露國カ日本ノ爲ニ其利益トナルヘキモノヲ讓ルトスレハ、日本ノ露國ニ對スル感情カ融和シナイトモ限ラレマイ」ト述ヘタ、「マ」氏ノ談話ハ蓋シ「ランズダウン」侯ノ意ヲ承ケテ、前日我輩カ口ヲ切ツタ同盟問題ヲ、眞面目ニ交渉スルノ緒ヲ開カウトシタモノテアラウ。

獨國代理大使言動ノ矛盾

右ニ云フ林公使カ「ラ」外相トノ會談トハ、多分「ソールスベリー」首相ノ歸英後五月十五日ニ同公使カ英國政府其ノ後ノ意嚮ヲ聞ク爲ニ「ラ」外相ヲ訪問シタ事ヲ指スモノタト思フカ、此際ハ矢張り一般論ヲシ

タ丈ケテ在ツタ所、其翌十六日「エツカードシュタイン」男林公使ヲ訪ネテ「昨日閣下ト外相トノ間ニ會談カ在ツタ後、自分モ外相ニ面會シタラ、外相ハ三國提携ノコトヲ話サレタカ、當國ノ内閣テ現ニ此事ヲ相談シテ居ルニ違ヒナイ、尙ホ自分ノ見ル所テハ、英國政府ノ意嚮ハ餘程此方ニ傾イテ居ル様テアルカラ折角念ヲ入レテ研究サレルカ宜シカラウ」ト語ツタ、頗ル奇怪ナ事ニハ四月十七日ニ林公使カ初メテ本件ニ關シ「ラ」外相ト會談シタ其二三日前「エ」男ハ林公使カ同公使一個ノ意見トシテ、去年結ハレタ英獨協定ヲ基礎トシ之レヨリ一層進シテ清國ノ領土保全ト現在ノ條約港ノ開放維持トノ支持ヲ三國テ保障スル日獨英協定ヲ結ハンコトヲ同男ニ勸誘シタ旨ヲ英外相ニ告ケタノテアル、此ノ「エ」男ノ話ハ「ランズダウン」侯カラ駐日英國公使ニ送ツタ公信中ニ揭ケテ在ルノタカラ間違ハナイコトト思フシ、又獨逸側ノ文獻ニ依ツテモ其通リテ在ル、即チ我國駐劄ノ獨逸代理公使ハ本國政府ニ電報シテ、日本側ノ秘密筋ヨリ内密ニ聞ク所ニ依レハ、在英林公使ハ同地ノ獨逸代理大使カ獨英兩國ハ極東ニ關スル協約ヲ交渉シツアルコト、及日本ノ加盟ヲ希望シテ居ルコトヲ同公使ニ告ケタト報告シタソウタト知ラセタ、此電信ハ四月十五日伯林ニ届イタカ、其翌十六日之レニ對シテ「エ」男ハ英國外務大臣ニ私信テ左ノ趣旨ノ回答ヲシテ居ル。

駐日代理公使ノ情報ハ全然不正確テ、獨英協定ヲ日本ノ希望スル様擴張スルコトニ獨逸政府カ如何カナ態度ヲ執ルカ知ラントスル、日本側ノ畫策タト信スル。數日前林公使余ニ對シテ、獨逸ハ英獨協商中清國ノ保全及門戶開放ニ關スル基礎ヲ擴張セル取極ニ日英ト共同シテ參加スルコト可能ナリヤト質問シタ、余ハ公使ニ獨逸政府ノ見解ハ知ラヌカ個人トシテノ考テハ、此考案ハ廣キニ過キルト思フ、英國ハ獨逸ヨリモ

ヨリ多ク清國ニ利益ヲ有シテ居ルカラ、先ツ英國政府ニ相談スル様勸メタラ、公使ハ英國ニハ既ニ話シタカ、獨逸カ均シク參加スルニ非サレハ清國ニ關スル協定ニ加ハルヲ得ヌトノ答テアツタト述ヘ、日本政府ノ訓令ハ自分カ英國ニ何等ノ提議ヲモ爲スヲ許サヌ、單ニ如何ナル程度迄英國ト支那問題ニ付共同シ得ル可能性カアルカラ探ルコトヲ命スルノミタカ、今迄ノ處テハ獨逸カ同時ニ加ハラナケレハ、英國ハ協定ニ加ハラヌト云フ印象ヲ得タコトヲ政府ニ報告シ得ルノミテ、又「ランズダウン」侯ノ言フ所テハ、獨逸ハ英獨協定ノ擴張ニ參加スルノヲ今迄ハ希望シテ居ラヌトノ事タ、ト附言シタカラ、余ハ若シ日本カ英國ニ提議スレハ英ハ之レヲ必ス獨逸ニ通知スルタラウト答ヘテ置タ。

以上「ランズダウン」侯ニ對スル「エ」男ノ談話モ、同男カ本國政府ニ爲シタ報告モ、林公使ノ記述并ニ其要領ヲ報告シタ本省宛ノ電信ト全然主客顛倒シテ居ルカ、我々トシテハ無論林公使ノ報告ニ信ヲ置カナケレハナラヌ。ソレナラ何故「エ」男ハ自分自身テ林公使ニ同盟談ヲ持掛ケテ置キナカラ、事實ト正反對ノ事ヲ英外相ニ告ケタカ、之レヲ説明スルニハ曩ニ揭ケタ林伯ノ推斷ト同様ノ理由ヲ基礎トスル外ハナイト思ハレルカ、「エ」男カ本國外務大臣ニ爲シタ報告ト、其著追懷錄中ニ揭ケテ居ル該報告寫トノ間ニハ、字句ノ相違カ多數發見セラレル、例ヘハ報告書中ニハ駐日代理公使ノ情報ヲ全然不正確タト云フテ居ルノニ、追懷錄ニハ全然ト云フ文字ヲ除イテハ居ルカ、之レハ何ヲ意味スルノテアロウカ、ソハ兎モ角トシテ日英同盟ノ談判ヲ、單ニ此談判丈ケ獨立ニ考察シタノテハ、適切ニ當時ノ空氣ヲ反影サセルコトカ出來ヌ様ニ思ハレル、何セナレハ日本ヲ同盟ニ加ヘル考カ英獨當局ノ間ノ話ニ上ツタノハ、「エ」男カ林公使ニ口ヲ切ル前ノコト

ヲ、當時同盟談ハ専ラ英獨ノ間ニノミ進行中タツタカラテアル。

明治三十一年ノ英獨同盟談

英獨兩國間ニ同盟談ノアツタノハ屢々タツタカ、比較的近頃ノ開談ハ獨逸側ノ記錄ニ依レハ、明治三十一年三月前ニ書タ「チエーバレン」氏カ加藤公使ニ日英提携ノ話ヲ持掛ケタノト同シ月ニ、矢張り「チエ」氏カラ在英獨逸大使ニ、英國ハ今迄ノ孤立政策ヲ此上繼續スルコトカ出來ヌ、問題ハ支那ニ關シテ許リテナク西阿弗利加ニ於テ佛國トモ起ツテ居ル、英獨二國ノ間ニ大政策テ一致スレハ、殖民地間ノ小問題ノ解決位ハ容易タラウ、若シ英獨ノ友好カ成立テハ、英國ハ清國ヲ獨逸ニ反對セヌノミナラス、全力ヲ擧ケテ獨逸ヲ支持シ、獨逸カ攻撃サレル時ニハ其味方ヲシ、三國同盟ニモ加ハリ、又條約ヲ結ンテ兩國ノ條件ヲ取極メルタルウ、ト切り出シタ。之レハ無論「チエ」氏個人ノ意見タルコトヲ前置キシテ述ヘタノテアルカ、「ハッツフェルト」大使ハ批評シテ、元來「チエ」氏ハ獨逸ト好ク無イノタカラ、此申出ハ獨逸ト露國トヲ爭ハセル目的ナノタト云フテ居ル。「チエーバレン」殖民大臣ハ其後モ英獨接近意見ヲ繰返シ、獨逸側ヲハ餘リ氣乗リセヌヲ見テ、若シ獨逸カ英國ト提携シナケレハ、英國ハ露又ハ佛ト了解ヲ遂クヘク、英獨間ニハ政治的妥結カ成リ立タネハ、殖民地問題ノ協議ニ入ルコトハ出來ヌ、ト迄極言シタカ、英國カ此提議ヲシタ真意ヲ對露策タト考ヘタ「カイザー」ハ露帝ニ之レヲ内告スルト同時ニ、自己ノ意見ヲ決定スル前ニ先ツ「ツァー」ノ意嚮ヲ聞キタイ、ト云ヒ送ツタ。此情報ニ接シテ大イニ驚イタ露帝ハ、三個月以前露國カ清國ト商議

ノ最中、英國カラ露ト協和シヨウト云フ提議ニ接シタ、曾テ無イコトナノテ不思議ニ思ツタカ、之レハ極東ニ於ケル露國ノ發展ヲ、隱レタ手段ヲ妨ケントスルモノタロウト考ヘラレタカラ、直チニ拒絕シタ、ソシテ其二週間後ニ旅順口ハ露國ノモノト成ツタ。獨逸カ英ノ提言ヲ聽クノ利益ナリヤ否ヤニ答ヘルノハ、全ク不可能テナイトスルモ甚タ困難タ、獨逸ハ自國ニ必要トスル所ニ從ヒ決定シテ差支ナイ、露獨兩國ハ常ニ親善ヲ、何ノ政治的衝突モ利益ノ背馳モ無イ、將來又然ルヲ信セヨ、ト返事シタ。是レハ明治三十一年六月三日ノコトテ、露帝ノ此回答ニ接シタ獨逸ハ其在英大使ニ訓令シテ、英國ハ露西亞ニモ協定ノ提議ヲシタトノコトテ在ル、獨逸ニ對スル提言ハ甚タ漠然トシテ居テ考慮シ難イカ、英國若シ殖民地問題ニ關シテ具體的ノ申出ヲシタナラ考ヘル餘地カアルカモ知レヌ、ト申込マセ、同月十一日獨逸外務大臣ハ駐獨英國大使ニ對シテ左ノ意見ヲ述ヘタ。

一、同盟協約ハ英國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス。

二、佛國ノ對獨意嚮ハ明瞭テアル、獨逸カ英國ト結ンテ佛國ノ極東政策ノ邪魔ヲスレハ、結果ハ直チニ露ニ現ハレルタロウカラ、之レニ對スル英國ノ具體的保障ヲ知ラナクテハ困ル、

三、露國ハ極東問題ニ關シテ獨逸ノ邪魔ヲシナカッタカ、英國ハ此問題ト殖民事項ヲ常ニ反獨態度ヲ示シタ、今恒久ノ良好關係ヲ作ル爲ニ、其政策ノ轉化ノ形態ハ如何テアルカ。

其後八月二十一日駐獨英國大使カ「カイザー」ニ謁見シタ時、露國ノ極東行動ヲ其儘ニシテ置クコトハ出來ヌト云フタラ、獨帝ハ露國ヲ目標トシテ英國ト手ヲ握ルコトハ獨逸ニ出來ヌ、露國ノ極東行動ヲ制肘スルノ

ハ困難タ、英國ノ軍艦ハ獨逸ノ東境ヲ防ク譯ニハ行カスト答ヘタノテ、英國大使ハ英國ハ必スシモ露國ヲ目標トスルノテハ無い、「チエーンバレン」氏ノ考案ハ英獨ノ間ニ防守同盟ヲ結ンテ、何レノ一方テモ二個國カラ攻撃サレタ時ニ他方ハ救援ノ義務ヲ負フカ、一個國カラノ攻撃丈ケナラ自力ヲ防クト云フノタト説明シタラ、「カイザー」ハ之レハ初耳テ全ク新タテ提議テ在ルカラ考慮ヲ要スルカ、何ニセヨ承諾シ得ヘキ基礎ヲ作ル爲ニ商議セネハナラヌト答ヘタ、其後英國カラ此種ノ基礎案ハ終ニ提出セラレス、同盟談モ一時打消エノ姿ト成ツタ。

明治三十四年ノ開談

夫レカラ三年經ツタ明治三十四年ノ正月ニ又「チエーンバレン」氏カラ、英國ハ光輝アル孤立政策ヲ捨テル時カ來タ、然シ其執ルヘキ方向ハ二ツアル、即チ三國同盟ヲ味方トスルカ、又ハ露佛同盟ニ加ハルカト云フ問題タカ、露國ト協同スルノハ非常ニ高價タト思フカラ、三國同盟側ト共ニ行動シ度イト思フ、是レニハ先ツ獨逸ト「モロッコ」ニ關シテ曩ニ協議シタ基礎ヲ密約ヲ結フニ在ルカ、若シ獨逸力之レヲ欲セヌナラ英國ハ支那、波斯ヲ犧牲トシテモ露國ト提携スルタロウ、ト獨逸大使「エツカードシュタイン」男ニ語ツタ。此頃英國ハ南阿戰爭ノ最中テ、又米國トハ「バナマ」運河問題テ紛爭シ、佛國トハ「ファシヨダ」事件ノ後始末カ未タ片付カス、露國トハ滿洲問題カアリ、日本トノ關係モ未定ノ有様タツタカラ、獨逸ハ英國カ露佛ト結フカモ知レスト云フタノヲ虛勢タト見縊ツテ、餘リ相手ニシナカツタカ、「ヴキクトリヤ」女皇ノ崩

御ト葬儀トノ爲明治三十四年一月下旬カラ二月初旬迄英京ニ滞在シテ居タ「カイザー」ハ「エドワード」七世ニ對シ、米國カ露ト結ンテ歐洲ノ勢力ヲ支邦カラ驅逐セント企テツツアルコトヲ物語リ、又露國ニハ如何程與エテモ飽クコトヲ知ラスカラ、之レト接近ヲ計ルノハ無意味タ、露米ニ對抗スルニハ獨佛英ノ協同カ必要テ、露佛同盟ハ在ルカ此同盟ハ佛國トシテハ「アルサス、ローレーン」ヲ恢復スル爲、露國トシテハ金ヲ得ル爲テ、露ハ目的ヲ達シタカ佛ハ其希望ヲ達スル見込ノ無イコトヲ感シテ居ル、露國カ佛蘭西ノ復讐戰ニ決シテ加擔セヌコトハ、露帝カ親シク自分ニ保障シタ所タト、熱心ニ英獨兩國要スレハ之レニ佛國ヲ加ヘタ三國接近ノ可能性ヲ力説シタカ、「カイザー」ノ意思カ英露ノ提携ヲ阻止セントスルコトニアツタコトハ餘リニ見エ透イテ居ル。

再ヒ獨國代理大使ノ矛盾報告

其後三月十八日「ランズダウン」外相ハ「エツカードシュタイン」代理大使ト會見ノ際、極東ニ於ケル日露衝突ノ危險ニ談及セルニ、「エ」男ハ獨逸政府ハ單ニ清國ノ現狀ニ關スル協定以外ニ、更ニ永續性アリ且ツ廣キ範圍ノ協定ニ關スル考案ヲ歡迎スルコトト信スル、其考案トハ專ラ佛露ニ對スル英獨兩國間ノ防守同盟テ、獨逸又ハ英國カ右ノ一國カラ攻撃サレテモ同盟ハ發動セヌカ、二國ヲ敵トスル場合ニ初メテ效力ヲ生スルコトトスルノタ、ト述ヘタトノ事テ、之レハ先年英國大使カ「カイザー」ニ云フタノト同一ノ考案テ在ル、是レ迄ノハ獨逸側ノ文書カラ材料ヲ取ツタカ、此三月十八日ノ會談丈ケハ英國外相カ其駐獨大使ニ送ッ

タ公信ノ拔萃テ在ル。然ルニ「エ」男カ此會談ニ於テ報告シタ「ホルシュタイン」參事官宛私信ヲハ復タ全然反對ト成ツテ居テ、同盟談ハ「ランズダウン」侯カラ話シ出シタ様ニ書テ在ル、恰モ林公使ノ場合ト同様タカ、今度ハ英獨二國間丈ノ話シ故、本國政府ニ迄事實ニ反シタ報告ヲスル必要ハ無イ様ニ思ハレル、然シ「ランズダウン」侯カ其在外大使ニ宛テタ情報公信ニ誤リカアロウトハ想像サレヌカラ、如何ニシテモ「エ」男ノ報告ハ腐ニ落チヌカ、若シ人ノ想像スル様ニ、「エ」男ハ「カイザー」直屬テ、其言動ヲ在リノ儘本省ニ報告スルノニ困ル事情カ在ツタカモ知レヌ、ト云フ見方ヲ假リニ正シイトシテモ、私信ヲ受取ル「ホルシュタイン」氏カ矢張り同様ノ地位ニ在ルノタカラ、同氏ニ迄眞實ヲ告ケヌ必要ハ起ラヌ様ニ考ヘラレル、或ハ同男ハ其頃三十七歳ノ働キ盛リタツタカラ、餘リ仕事ニ邁進シ過キ、其結果往々政府ノ訓令ヤ意嚮ヲ超越シタ行動ニ出テ、彌縫策ヲ講セネハナラス羽目ニ陥イツタノテハ無イカトモ思ハレル、「ハッツフェルト」大使モ「エ」男ノ報告ニハ誤謬カ多ク、自分ノ立場カ苦シイト「ランズダウン」侯ニ愚痴ヲ云ツテ居ル。何レニセヨ同盟談ハ三月十八日ノ會談以來其歩ヲ進メ、四月二十四日ニハ宰相カラ左ノ如キ訓令カ在英大使ニ發送サレタ。

一、三國同盟ニ英國加入ノ形式トスルコト。

二、同盟ノ發效ハ二國以上ヨリ侵害サレシ場合ニ限ルコト。

三、條約ハ公表セラレ、議會ノ協賛ヲ經ヘキコト。

四、日本ハ攻撃政策ヲ採ルニ付、純然タル防守同盟ニハ興味ヲ感セサルヘキモ、良キ政治仲間ニ加入スル

コトト成ル故、亦之レヲ利益トスヘシ。

獨逸ノ對日觀

當時獨逸ノ對日觀ハ三月二十七日附「ホルシュタイン」參事官ノ意見書カ能ク之レヲ闡明シテ居ルト思フカラ、其要旨ヲ左ニ譯載スル。

韓國ニ關スル日本ノ強硬政策問題ニ付テハ、之レヲ英國ニ委ネルノカ最善タト考エル。

露國トノ關係ヲ出來ル丈ケ擁護セントスル獨逸ニ取ツテハ、正面カラ進取政策ヲ採ル日本ハ、獨逸ヲ渦中ニ投セシムル底ノ仲間テアル、日本ハ其島嶼ヲ目下何人モ脅カサヌヲ知ツテ居ルカラ、防守同盟ニハ興味ヲ感セヌ、若シ今獨逸カ日本ト相互利益ヲ基礎トスル握手ヲ話合ヘハ、日本ハ共同ノ利益ヨリモ共同ノ侵略ヲ目標トスルタロウ、日本人ノ此心裡ハ一般ニ殊ニ露國ニ知レテ居ルカラ、獨逸カ日本ト共同行爲ニ關シテ相談スルコト自體カ、露國ヲシテ獨逸ハ今迄ノ防守的態度ヲ捨テ、侵略政策ニ轉換スル徵證タト看做サセル故、獨逸カ他ノ聯繫ナシニ日英ト共同シテ疑惑ヲ受ケルノハ不利益ノ極タ、ソシテ三國間ニ同盟カ出來レハ、二國內ノ急進分子ノ活動ハ續イテ起ルコトト思フ。

然シ英國カ三國間ニ同盟ヲ組織スル決意ヲ爲シ、日本カ英國ノ附庸トシテ之レニ投スル場合ニハ、事情ハ全ク異ルコトトナル、ナセナラハ亞細亞ニ於テモ歐洲ニ於ケルカ如ク守勢ニ立ツ英國ノ態度ハ、激シ易イ日本ニ對スル調整タリ得ルカラテアル。

要スルニ日本トノ話シ合ヒニハ、日本ニ韓國ニ於ケル自由行動權ヲ確立サセ、露國ヲ滿洲カラ驅逐スル爲日本ヲ援助スルト云フコトヲ基礎トセネハナラヌカ、之レハ無理ナ問題タ。獨逸ハ露國ト何等ノ政治協定殊ニ韓國ニ關スル條約ヲ持ツテ居ラヌカラ、獨逸ハ日露ノ爭ニ中立ヲ保ツノカ良イ、ソシテ獨逸カ中立ヲ守ルノハ同時ニ佛國ヲモ中立セシムル所以テアルコトヲ日本ニ告ケルカ良イ、此以外ニ適當ノ方法ハ無イト思フ。

此「ホルシユタイン」參事官ノ意見書ニ宰相ハ全然同意ト自記シテ居ルカ、日露ノ關係カ緊張シテ居タ其頃ノ獨逸ノ態度ニ付テ既ニ述ヘタ事實ト照合スレハ、能ク消息カ判ルコトと思フ。

英獨同盟談ノ決裂

英國トノ同盟ニ付テ獨逸ハ塊、伊ヲ牽キテ之レヲ結ハント欲シ、英露ノ爭ニハ日本カ必ス加ハルカラ英國ニハ不便カ無イ、若シ佛國カ露國ノ味方ヲスレハ三國同盟側カ英國ヲ援助スル、ト云フノカ此考案ノ基礎ヲ在ルカ、英國カラ見レハ獨逸ト丈ケノ同盟ナラ問題ハ比較的簡單タカ、塊、伊カ加ハルトナルト英國ニ全ク利害ノ無イ事件ノ爲ニ迄渦中ニ捲込マレル虞レカ非常ニ多イカラ、同盟ノ相手方ヲ三國トスル場合ニモ獨逸カ直接ニ攻撃ヲ受ケタ時テ無ケレハ英國ニ援助義務ハ起ラヌ、トシナケレハ困ルト云ヒ、又日本トハ支那ノ保全ト門戸開放トノ基礎ヲ別約ヲ結フ様ニナレハ結構タトノ意思ヲ表明シタ。然ルニ獨逸側テハ若シ英國ノ此要求ヲ容レレハ第三國ハ獨逸ヲ目標トシナカラ、先ツ塊カ伊ヲ攻撃シテ英國ノ援助義務カ生シナイ様ニ行

動スルニ違ヒナイカラ、此同盟ハ獨逸ニ取ツテ何ニモナラヌ、ト反駁シ五月中旬カラ商議ハ中絶シタカ、獨帝ハ其年ノ八月ニ英王ト又九月ニ露帝ト會見シテ居ル。畢竟獨逸當時ノ意圖ハ英國ト友好ヲ加ヘツツ、露國トノ親交ヲモ同時ニ増加セントスルニ在ツタ如ク、宰相初メ此二重政策ハ兩立シ得ヘキモノタト考ヘテ居タ様テアル。何レニセヨ英獨同盟談カ暗礁ニ乘リ上ケタノハ、獨逸カラ同盟ノ相手方ハ三國同盟ヲ無ケレハナラヌ、ト主張シテ一步モ讓ラナカツタ爲テ、「ソールスベリー」首相ハ五月二十九日ニ、此結合ハ英國ニ非常ナ負擔ヲ加ヘルカラ到底承諾カ出來ナイ、ト云フ意見ヲ書イテ居ル位テ、其時既ニ交渉ノ將來ハ見エタノタカ、英國テモ亦獨逸テモ自分ノ方カラ斷ハレハ、他方ニ之レヲ利用サレル虞レカアル故、双方共容易ニ談判打切りノコトハ口ニ出サヌ。試ミ十一月八日ト二十二日ニ英國外務次官補「バーチー」氏カ書イタ意見書ノ要領ヲ、左ニ掲ケテ見ヨウ。

獨帝ト其政府ハ同盟談ヲ持出シ、最近連リニ其速進ヲ逼マリ、若シ英國カ聽カナケレハ他國ト結ハント脅カスト同時ニ、英國孤立ノ危險ヲ高唱シテ居ル、此態度ハ數年以來同様テアル。

英國カ強力テ又眞實ノ同盟國ヲ持ツノハ其利益テ在ルニ相違ナイカ、獨逸ハ露佛ト惡シキノミナラス、其他ノ國トモ善クナイカラ、獨逸コソ英國ト結フ必要ヲ適切ニ感シテ居ルノテ、殊ニ英國ノ態度ヲ露佛側ニ漏シ、此二國カ英國ト接近スルノヲ妨ケル手段トセストモ限ラヌ。

獨逸ノ極東政策ハ露國ト英日トヲ隔離スルヲ主眼トシ、一般的戰亂ノ際テ無ケレハ、獨逸ハ兵ヲ動カス様ナコトハセヌテアロウ。英國カ獨逸ト同盟スレハ、英國ハ其大海外領土ニ關シテモ、塊伊ノ夫レノ様ニ獨

逸ノ見解ト軌ヲ一ニスルヲ要スヘク、然ラサレハ獨逸ハ英國ノ政策ヲ非難シ兵力ヲ貸サヌタロウ。故ニ同盟ヨリハ歐洲及地中海ニ關シ、政策ノ聲明ヲスル方カ良イ、三國同盟ト露佛同盟トニ對シ、英國ハ均勢維持ノ任ヲ持ツテ居ルカラ、之レニ加ハラヌトモ危險ハ無イ、又露佛カ英國ヲ攻撃シ英ノ形勢危クナレハ、ヤカテ獨逸ノ危險ト成ルノタカラ、假令同盟カ無クトモ獨逸ハ決シテ傍觀シテ居ラヌ。

何レニセヨ三國同盟ニ加入ノ形式テ同盟ヲ結フ事ハ出來ヌ、前年支那ニ付テ獨逸トナシタト同様ノ協定ヲ、波斯灣ヤ地中海ニ關シテ結フコトハ可能テアロウ、今話ヲ打切レハ獨逸カラ如何ニ利用サレルカモ知レヌ。

此意見書ニ對シテ「ランズダウン」外相ハ、波斯灣ヤ地中海丈ケテハ獨逸ハ満足セヌコトト思フカ、先方カ拒ンテ吳レレハ英國ハ拒絕者トナルコトカラ救ハレテ都合カ良イ、ト云フテ居ル。此波斯灣等ニ關スル協定ノ考案ハ、駐英獨國大使ニ話ハシタカ其儘ト成リ、宰相カ議會テシタ英國海上權專橫ノ攻撃滿説ハ英國ノ輿論ヲ著シク激昂サセタノテ、英國王ハ明治三十四年十二月末「カイザー」ニ、今後モ從前通り英獨兩國力總テノ點ニ共同センコトヲ欲スルカ、條約ヲ結ンテ之レヲ行フコトハ、此條約カ議會ノ協賛ヲ經ル見込カナイカラ困難タ、然シ自分ハ獨帝ト共ニ世界福祉ノ爲ニ共同シテ行動スルノニ吝テナイ、ト云フ趣旨ノ親翰ヲ送り、是レテ英獨間ノ同盟談ハ打切ラレタカ、此親翰ノ要旨ヲ駐獨英國大使カラ獨國外務次官ニ豫報シタ時同次官ハ、獨逸テハ同盟問題ヲ最初カラ此趣旨ヲ觀察シテ居タト述ヘテ居ル。

第十四章 日英同盟ト露國

日英同盟ノ成立

話題ヲ再ヒ日英同盟ノ交渉ニ戻スカ、伊藤内閣ノ後ヲ享ケテ明治三十四年六月二日ニ成立シタ桂内閣ノ會彌外務大臣ハ、前掲「マクドーナルド」公使ノ談話ニ關スル林公使ノ報告ニ接シ、又初メテ英國外相カラ相互防衛ノ爲協約ヲ結ンテモヨロシイト口ヲ切ツタ七月三十一日會談ノ電報ヲ受取ツタノテ、愈々話ヲ進メルニ決意シ、日本政府ハ極東ノ事件ニ關シ一定ノ協商ヲ爲スコトニ就テ英國提議ノ趣旨ヲ好視シ、且今迄林公使カ英國外相ニ語ツタコトハ全然認可スルカラ此上トモ英國ノ意嚮ヲ詳ニスル爲盡力センコトヲ希望スルト云フ電信ヲ發シタ。ソコテ林公使ハ是迄ヨリモ一步踏込ンタ話ヲスルコトカ出來ル様ニ成ツタカ、八月十四日「ランズダウン」侯ハ同公使ニ對シ最早意見ノ交換モ餘程進ンタカラ、重要諸點ニ關シテ政府ノ訓令ヲ貰ツテ置ク方カ良カラウト勸告スルト同時ニ、自分モ亦閣議ニ諮リ公使カラ提議カ在レハ之レニ答ヘ得ル様準備シテ置コウト述ヘタ。我國テハ九月二十一日小村氏カ外相トナリ、十月七日林公使ニ對シテ商議ノ全權ヲ委ネル電信ヲ出シ、其後折衝ヲ重ネテ出來上ツタノカ、明治三十五年一月三十日ノ日英協約ヲ在ル。

獨逸ノ加入問題——獨露ヘノ同盟協約通告